

だれも奪い去りはしない

ヨハネの福音書 10 章 22-30 節

はじめに

今日の聖書箇所は、「宮きよめの祭り」の時に、イエス様が「ユダヤ人たち」に語られた言葉が書かれています。「宮きよめの祭り」というのは、毎年 12 月 25 日から一週間行われるようで、22 節にも「時は冬であった」とあります。12 月 25 日と言えば、ご存知のようにキリスト教では「クリスマス」が祝われますが、その同じ時期に、ユダヤ教では「宮きよめの祭り」が行われるのです。「宮きよめの祭り」は、「光の祭り」とも呼ばれていて、12 月 25 日から一週間の間、一日ずつろうそくに光を灯していき、一週間後にろうそくの光をすべて満たすのです。まるで、「クリスマス」までのアドベントの時に、キリスト教では四週にわたって日曜日ごとに一本ずつろうそくに光を灯していき、「クリスマス」の時にろうそくの光をすべて満たすように、です。「宮きよめの祭り」は、紀元前 2 世紀頃から始まりましたから、キリスト教のアドベントにろうそくに光を灯す習慣は、実はこのユダヤ教の「宮きよめの祭り」から影響を受けたのではないかと、ある人は言っています。

「宮きよめの祭り」は、「宮」、つまり「エルサレム神殿」をきよめたことを記念する祭りです。紀元前 2 世紀頃に、ユダヤ教は大きな迫害を経験しました。シリアの王アンティオコス・エピファネスによって迫害を受け、「エルサレム神殿」は汚されたのです。神殿には、異教徒の偶像ゼウスの像が置かれました。そして、神殿ではそのゼウスに対して、豚のいけにえが献げられました。豚は、ユダヤ人にとって汚れた動物です。その汚れた動物が聖なる神殿の中で、いけにえとして献げられたのです。律法は焼かれ、もし律法を持っていることが見つかった場合は処刑されました。また割礼を施すことも禁じられ、割礼を施したことが見つかった場合も処刑されました。そのような激しい迫害の中で、祭司の一人であるユダ・マカバイオスという人が現れ、シリアの王に戦いを挑み、武力で勝利するのです。そして、ユダヤ教を、また「エルサレム神殿」を、シリアの王の支配から解放し、偶像に汚された「エルサレム神殿」を聖なるものへと再びきよめたのです。これが「宮きよめ」と呼ばれるものです。この出来事を記念して、毎年 12 月 25 日から一週間にわたってろうそくに光を灯すのが、「宮きよめの祭り」なのです。

1. 気をもむユダヤ人たち

この「宮きよめの祭り」の時に、イエス様は神殿の中を歩いておられました。すると突然、「ユダヤ人たち」に取り囲まれて、こう言われるのです。「あなたは、いつまで私たちに気をもませるのですか。あなたがキリストなら、はっきりと言ってください」。ここでの「ユダヤ人たち」という

のは、「パリサイ人たち」の事です。彼らは律法を厳格に守り、人々に律法を教える指導者たちです。彼らは、イエス様が「キリスト」であるかどうか、気になって仕方がないので。彼らにとって「キリスト」というのは、ユダ・マカバイオスのような英雄です。ユダ・マカバイオスが武力によって、シリアの支配から解放したように、この時ユダヤ人を支配していたローマ帝国からも武力によって解放してくれる、そういう英雄を、彼らは「キリスト」と考えていたのです。そして彼らは、イエス様に対して、「あなたはそういう意味での『キリスト』なのか」「あなたはローマ帝国から武力によって私たちを解放する英雄なのか」と尋ねているのです。

彼らは、「気をもんでいた」とありますが、この言葉はもともと「上に上げる」という意味があります。人間が抱き抱えられて上に上げられると、地に足がつかなくなります。「気をもむ」というのは、地に足がつかない状態です。地に足がつかない状態は、落ち着かず、不安です。ですから、ある翻訳では、この「いつまで私たちに気をもませるのですか」という部分を、「いつまで私たちを不安のままにしておくのか」と訳しています。

パリサイ人たちは不安なのです。「キリスト」というのは、「メシア」「救い主」のことですが、私たち人間は、自分の「救い主」が誰であるのかが分からないと不安なのかもしれません。逆に言えば、自分の「救い主」が誰であるのかが分かると、私たち人間は地に足がついた確かな歩みができるのかもしれません。

2. イエスの羊だけが、イエスを信じる

ではイエス様は、そのような彼らに何と答えるのでしょうか。25-27 節でこう言われます。**「わたしは話したのに、あなたがたは信じません。わたしが父の名によって行うわざが、わたしについて証しているのに、あなたがたは信じません。あなたがたがわたしの羊の群れに属していないからです。わたしの羊たちはわたしの声を聞き分けます。わたしもその羊たちを知っており、彼らはわたしについて来ます」**。

イエス様は彼らに、ご自分がキリストであることを話してきたと言われます。またイエス様は彼らに、ご自分がキリストであることを、わざをもって、つまり癒しの奇跡などを通して証ししてきたと言われます。つまりイエス様は、ことばと奇跡によって、ご自分がキリストであることを、彼らにはっきりと示してきたのです。しかし、それにも拘らず、彼らは信じなかったのです。

では彼らはなぜ、イエス様がキリストであることが信じられなかったのでしょうか。それは、イエス様によれば、彼らがイエス様の羊の群れに属していないからなのです。イエス様によれば、イエス様の羊ならば、必ずイエス様の声を聞き分けることができるのです。そして、イエス様に必ずついて行くのです。なぜ彼らがイエス様の声を聞き分けることができないのか、なぜ彼らがイエス様について行かないのか、その理由は、彼らがイエス様の羊ではないからだ、イエス様は言われるのです。

彼らがイエス様をキリストであると信じないのは、イエス様のことばや奇跡が不十分だ

からではありません。そうではなくて、彼らがイエス様の羊ではないからなのです。イエス様は、8：47 でも同じようなことを言われました。「**神から出た者は、神のことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者ではないからです**」。神様から出た人は、イエス様に聞き従えるのです。しかし神様から出ていない人は、イエス様に聞き従えないのです。

イエス様をキリストと信じる、イエス様の声に聞き従う、イエス様について行く、これらは、私たちから始まることではなく、神様から始まることなのです。私たちは、神様から出た者なのでイエス様を信じることができるのです。またイエス様の羊だからこそ、イエス様の声に聞き従い、イエス様について行くことができるのです。新約聖書の中のヨハネが書いたと言われる文書は、そのことを強調しているように思います。Ⅰヨハネ 4：10 には、こうあります。「**私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのさげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです**」。私たちが神様を愛したから、私たちと神様との関係が始まったのではありません。神様が私たちを愛してくださったから、神様が私たちを愛して、イエス様をこの世に遣わしてくださったからこそ、私たちと神様の関係が始まったのです。私たちが先ではなく、神様が先なのです。またⅠヨハネ 4：19 にも、こうあります。「**私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです**」。神様が私たちを愛してくださったからこそ、私たちも神様を愛せるようになったのです。

私たちは誰も、自分の力でクリスチャンになった人はいません。神様がただ恵みによって、私たちを選び、私たちを愛し、私たちをイエス様の羊としてくださったからこそ、私たちは信仰を持つことができたのです。

3. イエスは、ご自分の羊たちに、永遠のいのちを与える

さて、イエス様は続いて、28-30 節でこう言われます。「**わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは永遠に、決して滅びることがなく、また、だれも彼らをわたしの手から奪い去りはしません。わたしの父がわたしに与えてくださった者は、すべてにまさって大切です。だれも彼らを、父の手から奪い去ることはできません。わたしと父とは一つです**」。

イエス様は、イエス様の羊たちに「永遠のいのち」を与えられます。イエス様の羊とは、イエス様をキリストと信じ、イエス様の声を聞き分け、イエス様について行く人です。「永遠のいのち」とは何でしょうか。ある人は、この「永遠のいのち」について、次のように説明しています。「『**永遠のいのち**』とは、今の命をずっと 80、200、300 と延ばしていった寿命のことではありません。我々が今生きております肉体の生命は、いくら平均寿命が延びたからといっても、これは必ず、生まれてきたからには死ななければならない命です。永遠のいのちというのは、それとは別の性質の、全く別の次元の、他の種類の命であります。クリスチャンは、もう今、地上で、肉体の寿命に生きている最中に、イエス・キリストを信じて生まれ変わったその時から、永遠の命というもう一つの新しい命に生まれ直しているのです」。「永遠のいのち」とは、寿命が延びること、また寿命がなくなることで

はありません。今、私たちが生きている肉体の命とは、全く別のいのちです。クリスチャンは、肉体の命と同時に、もう一つ別のいのちを生きているのです。それは、神様と共に生きるいのち、つまり「永遠のいのち」です。肉体の命はやがてなくなりますが、「永遠のいのち」は決してくなりません。肉体の命が死んでも、「永遠のいのち」は生き続けるのです。肉体の命が死んでも、私たちは神様と共に永遠に生きるのです。私たちは肉体が死んでも、私たちの魂は天国で神様と共に生き続けるのです。そして世の終わりの時、最後の審判の時に、私たちの肉体はよみがえり、新しい天と新しい地で、永遠に神様と共に生きるのです。これが「永遠のいのち」です。イエス様をキリストと信じる人は、永遠に続くもう一つ別のいのちに、すでに生かされているのです。

4. だれも奪い去ることはできない

この「永遠のいのち」に生かされている人は、「永遠に、決して滅びること」がありません。なぜなら 28 節に、「だれも彼らをわたしの手から奪い去りはしません」とあるように、イエス様がその御手で、その人を守ってくださるからです。しかしイエス様だけが、その人を守ってくださるのではありません。29 節に、「だれも彼らを、父の手から奪い去ることはできません」とあるように、父なる神様もその御手で、その人を守ってくださるのです。父なる神様とイエス様が、その二つの御手で守ってくださるからこそ、イエス様をキリストと信じて「永遠のいのち」に生かされている人は、「永遠に、決して滅びること」はないのです。

私は 14 歳の時に、自分の信仰を公に告白しました。私は幼児洗礼を受けていたので、信仰告白をして、聖餐式に与るようになりました。しかし私は、自分の信仰を決断するまでに、ずっと不安に思っていたことがありました。それは、自分はこの先もずっとこの信仰を持ち続けられるだろうか、というものでした。今は信じているけれども、一時的なものではないだろうか。もっと確かな、強い信仰を持ってから、公に信仰を告白して聖餐式に与ったほうがよいのではないか。そう思って、なかなか決断できなかったことを覚えています。そういう私が決断できたのは、ある聖書の言葉に出会ったからです。一つは、先ほども読んだⅠヨハネ 4:10 の言葉です。「**私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し**」という言葉です。もう一つは、ヨハネ 15:16 の言葉です。「**あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び**」という言葉です。いずれも、私たちではなく、神様なのだという言葉です。私の信仰というのは、私が自分で支えていくものではなく、神様の選びと愛によって支えられていくものなのだということが分かったのです。

今日の聖書箇所が示している通り、私たちの信仰の始まりも、その歩みも、永遠に至るまで、父なる神様とイエス様が支えてくださるのです。私たちは、そのことに信頼しなければなりません。旧約聖書の詩篇には、こういう言葉があります。「**主によって、人の歩みは確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。その人は転んでも、倒れ伏すことはない。主が、その人の腕を支えておられるからだ**」(詩篇 37:23-24)。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、どんなに知識があっても、どんなに努力をしても、「永遠のいのち」を持つことはできません。ただ神様によって選ばれ、心を開かれ、信仰を与えられなければ、誰もイエスをキリストと信じることができないからです。あなたは、イエス様への信仰に生きる者に、肉体の命とは別の「永遠のいのち」を与え、生かしてください。そしてそのいのちを、永遠に支え、守ってください。どうか、このいのちにただ恵みによって生かされた喜びに、私たちを満たしてくださいように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。